

緑のエッセー

私が山に目覚めたのは中学一年生の時のこと。毎年、夏休みに出かけていた家族旅行で北アルプス・白馬岳の大雪山を見て、日本にもこんなに素晴らしい場所があるのかと驚き、山が好きになりました。それからは機会があれば山に登るようになり、大学では山岳部に所属、四季の山を登りまわりました。

独学で山岳写真を撮りはじめたのは昭和58年頃から。それまでは山の風景を撮っては、現像から上がった写真に

ント等を加えて35キロ、冬になると40キロ以上を担いで山に登り、撮影していたこともあり。雑誌のコンテストに応募して採用されたことや、全日本山岳写真協会に入会し、作品を批評しあう仲間ができたことで山岳写真の楽しみが広がり、いつそう写真にのめり込んでいきました。

山の頂をテーマにした作品が中心で、樹林帯にはあまり興味がなかった私が森林の美しさを知ったのは、平成3年



昭和35年、東京都大田区生まれ。50歳。昭和63年から全日本山岳写真協会会員。平成10年、第36回山岳写真賞優秀賞受賞。写真集「日本10名山二山の気」(ともに共著)ほか、山岳雑誌やカレンダー、ガイドブック等に多くの作品が採用されている。平成20年に個展「南アルプスの鼓動」を開催。
<http://homepage3.nifty.com/sanyo-izanai/>

らゆるものを写すようになりました。しかし、最近の森林は鹿の食害で荒れていることが多く、防鹿ネット等で気に入っていた風景を撮ることができなくなった場所も増えました。防鹿ネットがない場所では、食害ですっかり下生えがなくなってしまうと、次の世代が育っていない森林の風景を見かけます。四季折々に美しい世界を見せてくれる森林が、本来の姿を取り戻してくれることを願ってやみません。

がっかりすることの連続でした。素晴らしい山の姿をなんとかフィルムに納めたいと思い、構図の勉強を始めてみると、今までとは違う写真が撮れるようになります。すっかり夢中になってしまいました。学生の頃は一眼レフに標準レンズ一本で撮影していましたが、社会人になると機材も次第が増えてくるようになります。一番重い機材を使っていた頃は、カメラと三脚、交換レンズ等の撮影機材の重さが10キロ以上、それにテ

から3年間、全日本山岳写真展の特別コーナー・ブナの森の特集の取りまとめ役を任せられたことがきっかけです。山岳写真がメインの写真展では、森林をテーマにした作品が少なく、特集に必要な写真点数を補おうと自分で撮っているうちに、絶妙な木々の配置や枝ぶりに美を発見したり、雨に濡れる下草に生命の営みを感じたり、霧に煙る森林の幻想的な雰囲気気づき、今では山腹の森林から頂稜の展望まで、あ



「雨の日のブナ林」(平成4年・丹沢山、撮影：宮本宏明)